

古典語ノト(四)

—「つれづれ」の源流 2—

清水文雄

4

以上のことをたしかめるために、「つれづれ」の源流時代の具体的な用例について調べてみることにしたい。ここに源流時代というのは、平安時代を三期に分けると、大体前期と中期との境に当たる時期である。文学史的にいうと、古今集撰進前後の時期であるが、同時に伊勢物語が現在のような形態に生長しつつあった時期でもある。「つれづれ」のあらわれてくる作品で一番古いものは、現存作品としては伊勢物語と古今集とであるから、その用例に実際に当たってみればよいわけであるが、その前に、ちょうど同じ時期に編集された国語辞書「新撰字鏡」を調べておくことにしたい。

「新撰字鏡」は、醍醐天皇の昌泰年間(八九八—九〇二)に僧昌住によって撰ばれたものであるが、その中に、「儼」の字の訓として、つぎのようにしるされている。

(上略) 単己、独単也。比止利、又、豆礼豆礼。

すなわち、「儼」の意味は、漢語で表わすと「単己」「独単」であるが、それを国語に当てはめてみると、「比止利」(ひとり)または「豆礼豆礼」(つれづれ) となるというのである。今仮りに、

「単己」「独単」に「孤独」の語を当てるとすれば、逆に「豆礼豆礼」とは、「孤独」の意を表わすものとなる。このことは、具体的な用例に当たたる場合、重要な方向を示してくれると思うのである。

このように「新撰字鏡」は、「儼」の字の訓として、「比止利」と「豆礼豆礼」とをあわせ掲げているのであるが、それならば、「ひとり」と「つれづれ」の二語は、どんな場合でも同じ意味に使われているかという、必ずしもそうとはいえないのである。すなわち、当時の用例に具体的に当たってみると、「ひとり」という語は、すでに二通りの意味で用いられており、「新撰字鏡」にいう「単己」もしくは「独単」は、その一つの場合であることを知るのである。

それでは、その二通りの意味というのは、どういうことであるかという、まず第一は、これが本来の意味と思われるが、何人かの中の一個の人ということ客観的にいう場合である。従って、この場合は、自分と自分以外の一人一人とは、対等の関係にあると見ることが出来る。第二は、自分一人が、他から切り離された独立存在であると見る場合で、その際、自分は他のすべての人から拒否ない

し疎隔されているという孤独の意識がともなうのが特色である。従つて、この方は、前の客観的な認識に対して、主観的な心情を表わすものといふことができる。表記法としては、客観的な意味に用いる場合に「一人」と書くのに対して、この場合は、「独り」とするすのが普通である。前者には、どこまでも数の觀念がつきまとうが、後者では、数の觀念は消えて、自対他の關係だけとなり、自分以外のものは、その數に關係なく、すべて他者として、自分から隔絶するもの、ないしそれらが自分を疎隔するものと見るのである。「新撰字鏡」の時代には、この二義が並存していたことが、当時の用例に実際に当たつてみて知られるのである。そして「つれづれ」は、後者の「独り」に相當する語であることはいうまでもない。

5

このように、「ひとり」に二義があるとすれば、具体的にはどのように使われているかという点、たとえば、伊勢物語第九段の東下りの条に、「もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。」とある、その「ひとり」には、明らかに数の觀念が見られるが、つぎのような「ひとり」では、数の觀念はほとんど姿を消して、「ひとりぼっち」の意がつよく表に出てきているのを見るのである。

ささの葉におくしもよりもひとり寝るわが衣手ぞさえまさりける(古今集、恋二)

ひとりして物を思へば秋の夜のいなばのそよといふ人のなき(同、同)

前者は紀友則、後者は凡河内躬恒の歌である。どちらも恋の歌であることに注意しなくてはならない。前の歌では「独寝」、後の歌では「独思」という状態で、それぞれ恋人から離れている孤独感を表わしている。

「一人」の意味の「ひとり」は、むろん上代の古事記・日本書紀・万葉集等にすでにその用例が見えるが、同時に「独り」の意味の「ひとり」も、それらの文献にあらわれてきている。中でも、さきの二首の歌に見えるような「独寝」「独思」の状態において孤独感を叙べる発想法は、万葉第四期、すなわち大伴家持を中心とする時期の歌に多く見えはじめている。たとえば、

沫雪あはゆきの庭にふりしき寒き夜をすまからまかずひとりかも寝む(巻八、一六六三)

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を宿む(巻三、四六二)

二首とも家持の歌である。前者は、恋人と離れて寝るさびしさを詠んだ歌、後者は、亡妻を悲傷して作った歌となっている。ともに、「独寝」という状態における孤独感を歌つたものである。この種の発想をとつた歌が、特にこの期に目だつのであるが、このほか、「独思」という状態で孤独感を歌つた歌も、この期に見えはじめている。たとえば、つぎのような歌がある。

独りゐても思ふよひにほととぎすここゆ鳴き渡る心しあるらし(巻八、一四七六)

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば(十九、四二九二卷)

前者は、小治田広耳の歌、後者は、家持の歌である。広耳の歌は、「夏雑歌」の中に入つてはいるが、大体の感じとしては、相聞的発想のものといつてよい。しかし、後の家持の歌になると、むろん、恋愛感情も含まれていると思われるが、他の歌人に比べると、やや広い人間關係において、自己を濃視したとき生まれる孤独感が見られる。その意味においては、近代に通ずるものすらそこに感じられるように思う。このことは、その左註に、

春日遅々にして、鶯^{うぐいす}正に啼く。悵^{せいやう}悵の意、歌にあらすは後ひ
難し。よりにて此の歌を作り、式ちて締結を展ぶ。(下略)

とあることよって、想像することが出来る。「悵悵の意」の中には、恋愛感情以外に、頼勢の大伴氏の当主としての憂愁もこめられていると見なければならぬ。家蓮の傾斜を、歴史の転換期に身をもつて感じてゐる三十八才の家持の姿が見られるように思う。

6

このように、平安朝における「ひとり」の二義が、上代から受けつがれたものであることを知るのであるが、とくに、「独寝」「独思」の状態における孤独の概念が、平安文学のエスプリとして、その生成のモチーフとなったことは、文学史上の事実として、重要視されなければならぬ。その具体的な状況の一斑は、さきに古今集から引用した二首の歌によつて知ることが出来るが、さらに、それ以後の勅撰集の恋の部をひもといてみれば、いかに類想の歌が多いかにおどろくであらう。必ずしも「ひとり」という語が見られない場合でも、もはやそのような心身の状態においてでなければ、恋の歌は生まれないのでないかとすら思われるようになってくる。歌と、このような概念との結びつきが、はじめてはつきりした自覚にのぼつたのが、家持においてであったことは、さきに引いた左註によつて知られる。それは、歌によつて鬱情を展べ開くという方法の発見をも意味する。以後、歌は、このような自覚によつて、人生と相關するものとなつてくるのである。そのことについて詳しく述べる場所でないので、ここではこれ以上ふれることをひかえておきたい。

以上、「新撰字鏡」の出たころに、「つれづれ」という語が「ひ

とり」と同じ意味にとられていたことを、その説明から知り、同時代の「ひとり」の用例に具体的に当たつてみた結果、この語に「一人」と「独り」の二義があり、「つれづれ」は「独り」の方に相当すること、この二義は上代においてすではつきり見られたこと、とくに「独り」が万葉末期の歌に「独寝」「独思」の形で多くあらわれはじめたこと、等が明らかとなった。

それならば、「新撰字鏡」の出た時代に、具体的には伊勢物語や古今集に見られるような「独り」の意味の「ひとり」が、「つれづれ」とまったく同じ意味を表わすかという点、必ずしもそういふことはいえないのである。「ひとり」のほかに「つれづれ」の発生が見られるのは、「ひとり」では十分表わしえないものが、この時代の現実生活の中であらわれてきたことを意味するものであらう。そのことは、用例に当たつてみれば、わかることであるが、その相違を結論的にいうと、たとえば、「ひとり」には、孤独の自己をいだきしめるような精神の緊張が見られるが、「つれづれ」には、むしろ緊張の後の弛緩の方がつよく感じられる。同時に、それだけ孤独感も深まるとも見られるのである。「新撰字鏡」に同義語としてあげているのは、その共通点である「単己」「独単」、すなわち「孤独」という中心になる要素に着眼した説明であつたとみてよい。ことばとしては、両者は以後併行してそれぞれの歴史を歩むのである。

7

つぎに、「新撰字鏡」と同じ時代の作品として伊勢物語をとりあげ、その中に見える「つれづれ」の意味を調べてみることにしたい。

むかし、をとこありけり。人のむすめのかしづく、いかでこのをとこに物いはむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、物病みになりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親ききつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれとこもりをりけり。時は水無月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。螢たかく飛びあがる。このをとこ見臥せりて、

ゆく螢雲の上までいぬべくは秋風ふくと雁につげこそ

暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなく物ぞ悲しき(第四十五段)

一人の男が、まさに命絶えんとする女から、はじめて愛の告白を伝え聞いて、あわてて女の家にかけてけるが、女はまもなく息をひきとる。女に死なれた男は、そのまま女の家にもっている。その時の男の心身の状態を「つれづれ」といひ表わしたのである。はじめて愛を確認し合った二人の間柄が、女の死により、一瞬にして絶たれたために、男のうけた衝撃はかえって大きかったといえる。しかし、「つれづれ」はそのような瞬間的な激動の状態をさすのではなく、むしろ、激動の後の、空虚な時の流れにみずからをまかせた男の、孤独な心身の状態をさすものと見るべきであらう。従つて、それは瞬間的なものでなく、持続的なものである。別の立場からいうと、心身の緊張の後に訪れる、弛緩ないし放心の状態であるといつてもよい。

このように見てくると、この「つれづれ」は、単純に「ひとり」(独り)と同義語と見るわけにいかないことがわかる。「ひとり

り」には、弛緩ないし放心の意味は含まれていないからである。そこには持続の意味もほとんど認めることができない。あつたしてとも稀薄である。そこに明らかに認められるのは、他から隔絶された孤独の状態の意識である。そして、「つれづれ」と共通するものとしてはっきりいえるのは、その点だけである。これは、「つれづれ」という語が、もともと「ひとり」とは別の系統に属していることを暗示するものとせねばならない。

ともあれ、この「つれづれ」は、なにかの方法によって、慰め紛らされなければならぬ。それならば、ここでは何によって「つれづれ」が慰められているかという点、それは音楽と和歌によってである。すなわち、宵の内に奏される「あそび」は、死者の靈魂を慰め鎮めるためのものであるが、同時に、「つれづれ」とこもりおる男自身の心を紛らすことともなったのである。これは、ヨーロッパの鎮魂曲と同じ発想によるものと思われる。そういえば、古代の和歌には、鎮魂歌の発想をとったものが多い。あとで詠まれる二首の歌も、そういう部類に入るものと見てよい。やがて、夜が更けて、涼しい風が吹いてくる。その風に乗つた螢が、中天高く飛び上るのを見て、靈界の使者とされる雁をこの地上に呼ぶ歌をよむ。「ゆく螢」の歌がそれである。これは、天上界にある死者の靈から、新たに音信を得ようというのである。つぎの「くれがたき」の歌は、同じ孤独感が直叙的に表現されている。この二首の歌を詠むことによつて、実は男自身の心も、さきの「あそび」の場合と同様、慰められるのである。

むかし、水無瀬にかよひ給ひし惟喬の親王、例の狩しにおはします供に、うまの頭なる銚つかうまつれり。日ごろへて、宮に

かへり給うけり。御おくりして、とくいなむとおもふに、大御酒たまひ、禄たまはむとて、つかはさざりけり。このうまの頭心もとながりて、

枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくにとよみける。時はやよひのつごもりなりけり。親王、おほとのごもらであかし給うてけり。

かくしつつまうでつかうまつりけるを、思ひのほかに、御髪おろし給うてけり。

正月にをがみたまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いとたかし。しひて、御室にまうでてをがみたまつるに、つれづれといと物がなしくておはしましければ、やや久しくさふらひて、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとはとてなむ泣く泣く来にけり。(第八十三段)

ここに見える「つれづれ」は、紀氏出身の女性を母に持つ惟喬親王が、藤原氏に疎外され、鬱勃たる志をいだいて、不遇の日々を送っているうちに、同じ思いをいだくグループからも離れて、単身小野の里に遁世庵住する状態をいっただものである。この出家は、直接的には、みずから求めて孤独の道を選んだ場合であるが、それは、ようやく勢力をふるいはじめた藤原氏に疎外されたことが原因となつているのである。そして、同じ伊勢物語でも、さきの第四十五段が、一対一の恋愛関係にあった男女のうちの一人が死んだ場合の、いわば個人的な契機によるものであるのに対して、この段は、そこに社会的、政治的な契機が考えられる点で違つているのであるが、結果からいえば、他から切り離された一人の男の孤独な心身の状態

をさす点は、さきの段と同じである。そして、ここでは、男の訪問そのものが、親王の心を慰めるためのものであるが、その庵室に至りついでからは、昔のことを思い出してする物語、さらに親王の心をわが心としてよむ和歌も、親王の「つれづれ」を慰めることになつている。なお、ここでも、遁世発心された当時の緊張はすでに弛み、孤独な庵住をつづける親王の心身の状態が、「つれづれ」ということばでとらえられているのである。

以上、伊勢物語に見える二つの用例によって、「つれづれ」の源流時代の意味を吟味してみたのであるが、これをひっくりかえしてみると、つぎのようになる。すなわち、「つれづれ」は、個体の孤独な心身の状態をさす語であるが、それは、他からの隔絶をよよく意識した当初の緊張状態ではなく、後に倦怠ないし退屈の語によってよばれる意味を萌芽として内包する、心身の持続的な弛緩ないし放心の状態をあらわしている、ということができる。(三八、二、一一)

(本学教授)